物質でできている肉体と、神ど自身の生命の分与とも言われる霊魂と、この二つのものから成り物質でできている肉体と、神ど自身の生命の分与とも言われる霊魂と、この二つのものから成り らず』と。人間がひとりでいることはよくないことだというのです。では、人間がふたり以上、た のです。ところがその時になって、神は突然ひとり言を言われます。『人、ひとりなるはよろしか 立つところの、最初の人類でありました。この男アダムは、自分に人間としての生命を与え給う 造りになりました。それは、土によって……つまり土を形成しているもろもろの元素と全く同じ 記された物語をかいつまんでお話してみますと、人類創造の暁、神はまず最初にひとりの男をお おもしろい物語が記されています。それは人祖アダムとエワの創造の物語でありますが、聖書に キリスト教のバイブルを繙いてみますと、旧約聖書の第一巻、創世記という書物の中にたいへん 続く、神の言葉によって、はっきりします。すなわち、神は「人、ひとりなるはよろしからず」 くさんいればいるほどよいのかと申しますと、そうではないので、この言葉の意味は、すぐ次に た神に、光栄と感謝とを捧げながら、希望に充ちた長い人類歴史の第一歩を踏みしめようとした 0

に、人、男たるものは、已が父母を離れてその妻につき、ふたりは一体となるべきなり」と。 ゼは、すぐに引き続いて、この話の結論のように、次の言葉を書き添えています。「かかるが故 しめ、「これこそ私の骨の骨、私の肉の肉だ!」と叫んだというのです。この聖書を書いたモイ き、アダムは、彼女が何から造られたのかを本能的に悟ったかのように、エワをしっかりと抱き もって、ひとりの女エワを創造なさいました。目覚めて、自分の前に立つ美しい女エワを見たと で神は、アダムを深く眠らせ、その熟睡している間に、アダムの肋骨の一本をとり出し、それを るのはよくない、ではもうひとりの人間、神がアダムに与えようとされるもうひとりの 人間と つ、ふたりして已が人生を完成していくための人生の伴侶でなければならなかったのです。そこ て、ただ、アダムと同類の人類のひとりであるというばかりではなく、実に、アダムにかなう助は、ただ、アダムと同類の人類のひとりであるというばかりではなく、実に、アダムにかなう時のは、 と言われてから「我、彼にかなう助け手を彼のために作らん」と曰うのです。人間がひとりでい 手、すなわちアダムと共に笑い、アダムと共に泣き、アダムと共に喜び、アダムと共に苦しみつ さて、皆様、この聖書の記録は、これを、そのまま、文字通りに取り上げることができないこ

ます。それは、第一に、人間にとっては、自然法に従って、結婚という制度が必要であるという とは言うまでもありませんが、しかしこの話が、本質的に何を言おうとしているかは明白であり

こと、第二に、女が男からできたのだという暗示によって、結婚生活内における男女の立場、す

ことであります。 妻なくしては完全な人生を生きることはなく、妻は夫なくしておのが生命を完うできない……夫 書はみごとに喝破しているのです。「かくてふたりは一体となるべきなり」……ふたりがふたり の間、一部の人類が、口から口に語り伝えて来た伝説をそのまま書き留めたものだと言われま は妻の、妻は夫の分身、半身となりきる……そこに結婚の聖さがあると聖書は言うのです。 結婚によって一度結ばれた後には、ふたりはふたりして始めて一つの生命を生きるのです。夫は は、青年と少女とは各自が自分の生命を生きて来ました。それは二つの生命でした。けれども、 して一つの体、一つの心になるとすれば、夫は妻の半身、妻は夫の分身なのです。結婚するまで っていますが、実は、これはモイゼの発明ではなくて、それまで、恐らく、数万年いや数十万年 夫は妻にとって、一体何であるのか? 妻は夫の何に当たるのかなどという論議の愚かさを聖 この聖書が書かれたのは、今からおよそ三千五百年ばかり前で、著者はモイゼということにな

聖書というと、すぐにキリスト教に結びつけてけぎらいする人々があるかもしれませんが、し

えて来たという一つの事実の中に、私は人間というものの厳粛な宿命を見い出すような気がする のであります。 かし、人類が地上に出現して間もなくの時代から、すでにこのような結婚観を伝説として語り伝

の一つの基盤であることは言うまでもないことでしょう。 であります。そして結婚という制度が一対の男女の愛情によって、その義務を果たしていくため せられています。それは、おのが子供を生み育てて、人類という種族を永続せしめるということ さて、人類には、植物や他の一般の動物たちと同様に、大自然の法則に従って一つの義務が課

磨きあういのち くれてやるでしょう。子猫は貰われて行った先で、ミルクやカツオ節のご飯などで一人前の猫に な相異に注意してみましょう。たとえば、猫の子が生まれるとたいてい一カ月ぐらいでどこかに ここで私たちは、精神生活を営む人類と、そうでない他の一般の動物たちとの間にある根本的

第三話 を逆立てて身構えたあの強い母性愛の本能はもう必要がなくなったのです。子猫が生まれて一カ に見向きもしなくなります。生まれたばかりの子猫のそばに見知らぬ人が近づこうものなら、毛 のです。三匹の子猫の中一匹がいなくなっても別に捜そうともしませんし、二カ月もたてば子猫 最初の二、三日は母を慕って泣きましょうが、 すぐに忘れてしまいます。 母猫にしてもそうな

月の間……と申しますと、猫の寿命をかりに十年すなわち百二十カ月と見て、全生涯の百二十分

一の期間ということになりますが、その間だけ、子猫には母性愛の本能が必要なのだと大自然

はみたのでしょう。それも母性愛だけ、子猫には父親の愛は必要ではありません。 年月を待たねばならないのです。しかも、母性愛だけでは足りません。子供が身も心も一人前の 叩いてチッチパッパというでしょう。これではまだまだ使いものになりません。人間の子供が 生涯の百分の一どころか、十分の一の期間が過ぎた時、人間の子供は幼稚園に行って、お手々を 人格の形成を見るためには、父親のきびしいしつけと、母親の細やかな愛情とがなければならな 人前になって 両親の許を離れてよいというまでには、 約二十年、 つまり、 全生涯の三分の一の ところが人間の場合はどうかと申しますと、人間の寿命をかりに六十年としますなら、その全

いのです。 す。言い換えたならば、家庭をもって子供を生みかつそれを育て上げるということは、夫と妻と 結婚後、二年たって最初の子供が生まれ、それから平均三年おきに四人の子供を生んだとします と、最後の子供が二十才になって両親のもとを離れてもよいという時がくるときには、父親は六 十二才、母親は五十八才、すなわち、夫婦ともに、その人生の大半を終わっているはずでありま ですから、仮に男子が二十八才、女性が二十四才で結婚生活に入ったとしましょう。そして、

係に結び合わされたものであるとみるのが自然法の立場なのであります。 ましょう。従って、結婚とは、ひとりの夫とひとりの妻とが、再び別れることのない不可分の関 が一体となり、その全生涯をかけてこそ始めて成し遂げられる重大事業なのだということになり

いでしょうか。 たりして生きるいのちの完成を目指す、人生の修業の道場こそ、それこそが結婚生活なのではな 忍びあい、互いの過失を許しあい、互いに恵み、互いに与え、互いの幸福を祈り合いながら、ふ | 夫と妻とは 人生の伴侶、互いの分身 なのです。お互いの 分身として、互いの 欠点を

ところもなく、暖かな春の陽ざしを浴びて互いにほおえみかわす、満ち足りた老境の深さと静け げて世に送り出した老夫婦が……完全にお互いの分身となりきりながら、今はもう何の求めあう 中にきびしく鍛えられて、始めて人生の実りの秋を迎えるのです。最後の子供をりっぱに育て上 ついに、内に豊かな実りを宿して黄金色に輝き波打つとき、人々は実りの秋の美しさを讃えると 同じように、青春の若さの美しさも、夫とし妻として結ばれた結婚生活という愛の修業の道場の の青々とした美しさが、やがて、きびしい太陽の熱に耐え、激しい風と雨との試煉を乗り越え、 しさはあまりにも生の美しさ、いわば、未熟の美しさなのです。けれども、ちょうど、春の田畑若あゆのようなピチピチとした青春の若さ、それは確かに美しいものです。けれども、その美

がひとりの妻を労り続け、ひとりの妻が生涯かけてひとりの夫を愛し抜くということは、至難ながひとりの妻をだち やがて来る人生の夜を思いましょう。生きるということはきびしいことです。中でもひとりの夫 ない愛欲の対象を求めてさまよい歩き、ついに、身も心も疲れ、なえ果てた淋しい人生の末路を ことかもしれません。けれども、欲情のおもむくままに、次から次へと絶対に満たされることの 皆様、きょうもどうやら、みちのくに静かな夜がふけて来たようです。一日の夜に、私たちは

迎える愚かさに比べたら……。 しての誇りと喜びとがみなぎるのです。 皆様、生きるということはきびしいことです。けれど、その「きびしさ」の中にこそ、

ります。いつか皆様と共に、この一句を口ずさみ得たらと思います。それは 「年をとるということは、楽しいことだ!」という一句であります。 私には、いつの日にか心の底から、しみじみとした喜びをもって口ずさみたい一つの言葉があ

では皆様、おやすみなさい。

## 四 話 理解しあうい 0

えてほしいと頼みました。隣りの若主人はニッコリ笑って、 の夫婦者には、真に理解し難いなぞでした。そこである日、隣りの家へ出かけて行って、いった い、どうしてたくさんの家族が毎日毎日けんか一つしないで暮らして行けるのか、その秘訣を教 ってニコニコと、いかにもしあわせそうなありさまは、夫婦げんかを日課のようにしている隣り 未だかつて口げんかの声らしいものの漏れるのを聞いた人がないのです。いつ行っても一家こぞ に子供がふたり、それにお姑までが加わった大家族ですが、不思議なことには、その家からは、 ののしりあって不愉快な日々を過ごしているのでした。ところが、その隣りは大世帯で、若夫婦 の間にはけんかの絶えたことがありません。ちょっとしたことが原因となっては、互いに口汚く まして、その一軒には、子供のない中年の夫婦が住んでいましたが、どういうわけか、その夫婦 「ああ、そのことですか。それはなに、ちっとも不思議なことではないのですよ。あなたのお家 皆様は、こんな日本の古い話をご存じでしょうか?ある所に、隣りあわせの二軒の家があり